『心理学紀要』（明治学院大学）第 28 号　2018 年　49–57 頁

【原著】

小学校教科生活科に関する大学生の意識調査

松　永　あけみ（明治学院大学心理学部）

要　約

本研究の目的は，小学校で生活科の授業を受けた大学生が，生活科にどのようなイメージをもっているか，生活科の授業で記憶に残っている活動はなにか，生活科によってどのようなことが身に付いたと思っているかなど，生活科に関する意識を明らかにすることである。その結果，自然体験や地域探索をして楽しい教科というイメージを持っている者が多く，栽培や町探険などの活動が記憶に残り，自然や身近なものへの興味・関心が身に付いたと認識している者が多い。逆に，自己の成長に関する活動や身に付いたことを挙げている者はほとんどいなかった。

キーワード：生活科，大学生，意識調査

問題

平成元年の学習指導要領改訂によって，小学校低学年に生活科が新設され，平成 29 年 3 月に 3 度目の改訂となる次期学習指導要領が告示された。生活科は，子どもの活動・体験を重視し，子どもの意欲，思考力，判断力，表現力など，知識ではなく，子どもの学びの土台となる力の育成を目指した教科であり，新設当時は，生活科の命脈は，精々時期改訂までの 10 年であるという陰口まで聞かれたと言われる（高橋・藤田，1998）ほど，知識の獲得を重視するこれまでの教科とは性質を異にする教科であると考えられていたことがわかる。しかし，このような懸念にもかかわらず，今回 3 度目の改訂を迎える。

今回の学習指導要領改訂（文部科学省，2017）では，「未来を切り開くための資質・能力の一層確実な育成」が重視され，各教科において，育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に基づき整理された。生活科は，この三つの柱の基礎を培う重要な教科であり，生活科の役割が一層強くなっていると考えられる。そして，このような中学年以降の全ての教科の基礎となる科目ゆえに，取り扱う内容や指導方法などの検討が，非常に重要である。しかし，生活科は，小学校 1・2 年生のみにある教科であり，思考力，判断力，表現力などの育成を目指す教科であり，教科により育成された力が身についたかどうかがわかりにくく，さらに，その成果は直ぐには見ることはできず成果を捉えることが難しい教科である。それゆえ，生活科という教科の成果を踏まえた生活科の内容や授業のあり方についての検討は，小学校 3 年生以降の子どもたちを対象に調査する必要がある。

高橋・藤田（1998）は，生活科導入の時期に，生活科の授業を受けたある国立大学付属中学校 1 校の中学 1 ～ 3 年生，360 名を対象に，生活科のイメージに関して選択肢を設けた質問紙により調査している。生活科が自分にとってためになっていると考えている生徒（受容群・容認群）とそうでない生徒（非受容群）は，約半数

であり，楽しみであったとする生徒は約 7 割程であった。また，覚えている内容は，最も多い単元が「飼育単元」，次に「栽培単元」，「学校探索」であった。さらに，生活科のイメージについては，受容群・容認群は，「自然と関わりができる教科」「他人と関わりの持てる教科」「生きる上で大切な能力を養える教科」など肯定的なイメージを持つ者が多く，非受容群では，「遊びと区別がつかない」「何を学ぶかわからない」というイメージを持っている者が多いという結果となっている。

野田（2005）は，生活科導入時の学習指導要領下で学んだ子どもたちの心に残っている生活科の活動や体験を把握し，子どもたち自身が認識する生活科の授業を通して身につけた力とは何かを明らかにするために，2003 年 11 月～ 12 月に選択肢（複数回答可）を設けた質問紙調査を実施した。対象は，国立大学の付属小学校および生活科の研究指定校であった小学校の小学 3 年生，6 年生，それらの学校の卒業生である中学 3 年生および高等学校 3 年生であった。生活科の活動の選択項目としては，表 2 の①～⑲までの項目が挙げられた。その結果，生活科の心に残る活動として全ての学年で 50％ を超える活動が⑮「栽培」であった。また，小学生と中学生では，①「校内探索」が 50％ を超えていた。また，小学校 3 年生のみ⑬「昔遊び」が，それ以外の学年では②「地域探索」が 50％ を超えていた。身に付いた力の選択項目は，表 3 の①～⑳までの項目が挙げられた。その結果，全ての学年で①「生きものに親しむこと」が最も選択率の高い項目であった。また，⑫「集団で学ぶ楽しさや協力の姿勢」が，50％ を超える選択率であった。

野田・永田（2005）は，野田（2005）の調査対象の一つであった附属小学校のデータを詳細に分析しているが，ほぼ同様の結果であった。

また，友田・石原（2006）は，野田（2005）の全国調査と同様の調査方法により，2005 年 11 月に，平成元年学習指導要領下で学んだ大学生 186 名を対象に調査を実施し，比較している。その結果，心に残っている活動において選択率が高かった項目は，⑮「栽培」や⑤「町探険」であった。一方，選択率の低い項目は⑰「できるようになったこと発表会」という 1 年間の振りかえりであり，全国調査も同様の傾向であった。生活科で身に付いた力において選択率が高かった項目は，全国調査と同様に①「生きものに親しむ」⑫「集団で学ぶ楽しさや協力の姿勢」であった。一方，⑤「住んでいる町や人への関心」は，全国調査では選択率が低かったが，本調査では高くなっていた。

野田（2015）は，2003 年の調査（野田，2005）と同様の調査を 10 年後，2013 年 11 月～ 2014 年 1 月にかけて実施した。対象は，小学校 5 年生 751 名（平成 20 年改定の学習指導要領移行期世代），中学校 2 年生 863 名（平成 10 年改訂の学習指導要領世代）であった。なお，生活科で身についた力には，新項目として表 3 の㉑～㉕が追加された。心に残っている生活科の活動は，両学年とも⑮「栽培」（選択率 72.4％）の選択率が最も高く，次いで順に①「校内探索」，⑬昔遊び，②「地域探索」で，10 年前とほぼ変わりがなかった。前回上位であった⑭飼育活動が 53.9％ から 35.4％ と下がっていた。生活科で身に付いた力は小学校 5 年生が，①「生きものに親しむ」，③「自然を大切にする」，⑫「集団で学ぶ楽しさや協力の姿勢」，⑭「生活していく上で大切な習慣が身に付く」，㉓「本やインターネットで情報を集める」が 60％ 以上の選択率であった。中学 2 年生では，①，㉓が 60％，③，⑫，⑭が 50％ 近くの選択率であり，両学年とも，10 年前の結果とほぼ同様であった。

生活科で心に残っている活動は，特に指導が充実していた内容であると考えられる。逆に，心に残っている生活科の活動として選択率の低い項目は，指導の充実に課題があるものと考えられる。身に付いた力は，生活科のみで培われるものではないが，生活科の効果として子ども自身が認識していることであり，生活科の効果を考える上で，意味のある認識であると考えられる。それゆえ，これらの調査は，これからの

生活科授業のあり方を考える上で重要な資料となる。

本調査では，平成10年改訂の学習指導要領世代の大学生を対象に，生活科に関する意識調査を実施する。本研究の対象者は，野田(2015)の調査の中学2年生と同世代である。野田(2015)の対象者は，国立大学付属小学校および生活科の研究指定校の出身者であり，いわば，生活科について精力的に研究してきた学校であり，一般的な傾向であるか否かは，不明である。本研究では，不特定の小学校出身者を対象とし，より一般的な傾向をつかむことを目的とする。また，これまでの調査では，選択肢を設けており，記憶が曖昧であっても再生のヒントが与えられており，本当にそのように記憶に残っているのか確かではない。そこで，本研究では，自由記述により回答を求め，対象者の記憶によるより明確な資料を入手できるようにする。このような方法による調査資料を基に，今後の小学校の生活科の授業のあり方について検討することを目的とする。また，本調査では，大学の「生活」の授業の受講者を対象とし，大学における授業内容を検討するための資料とする。

具体的には，1. 生活科のイメージ，2. 生活科の授業で記憶に残っている活動，3. 生活科で身に付いたこと，4. 生活科の教科としての特徴の4点について，大学生の認識を調査する。

方法

対象者：大学1年生（小学校教員免許取得希望者）128名。

実施時期：2016年9月，大学における「生活」授業の第1回目の授業開始時。

手続き：自由記述による質問紙調査。

質問内容は，以下の通りである。

1．小学校の教科生活科には，どのようなイメージを持っていますか？
2．小学校で受けた生活科の授業で，どんなことをしましたか？覚えていることを書いてください。
3．小学校で受けた生活科の授業を通して，あなた自身，何を学んだり，身に付けたりしたと思いますか？
4．小学校の生活科とは，どのような教科だと思いますか？

なお，調査対象者には，本調査は記名式であるが，氏名は授業の出欠席の確認に利用し，質問紙の回答は個人を特定しないように分析し，回答内容は本授業の成績には一切関係がないことを伝えた。

結果

質問項目ごとにカテゴリーを作成し，記述された内容を各カテゴリーに分類したが，記述が複数のカテゴリーにまたがっている場合は，それぞれ該当するカテゴリーに1回のみカウントした。

1．生活科のイメージ

高橋・藤田（1998）を参考に，自由記述内容から帰納的にカテゴリーを作成した。結果を表1に示す。

イメージとしては，植物を育てる，昆虫を観察するなどの①「自然体験」が最も多い。次に多いイメージは，⑨「楽しい」というイメージである。また，①～⑤は，体験ということでまとめることができるが，それらを合計するとダブルカウントはあるが，約7割となる。

また，⑥「生活の基本」，⑦「理科と社会の合科」というイメージを持っている者も14%程いた。

2．記憶に残っている生活科の活動

野田（2015）のカテゴリーに基づき，表2①～⑲のように分類し，それ以外の活動は⑳「その他」とした。結果は表2の通りである。

⑮「栽培」が最も多く，7割の学生が挙げている。次いで，⑤「町探検」，⑭「飼育活動」が多く挙げられている。さらに，②「地域探索」を挙げている学生もおり，⑤「町探検」と合わせると，学校の外に出て活動した経験が記憶に残っている者が多い。さらに，⑮「栽培」と⑭

表１「生活科」のイメージ

	カテゴリー名	記述例	人数	割合
①	自然体験	自然と触れあう　動物の世話	33	25.8
②	地域探検	校外を探検　地域と触れあう	19	14.8
③	体験	自分の目で見て体験したりする　教科書中心の学びよりは，実際に体験することが多かった　座学というより動いて学ぶ	19	14.8
④	遊び	遊び　遊び回っている	14	10.9
⑤	協同	友だちと協力する 協同作業	5	3.9
⑥	生活の基本	生きていく上で生活の中で必要なことを学ぶ　ルールを学ぶ　日常生活で必要なことを学ぶ　身の回りのことを学ぶ	18	14.0
⑦	理科と社会の合科	理科と社会を混合させた教科　理科のような教科	19	14.8
⑧	勉強でない	勉強ぽくない教科　あまり頭を使わない教科	9	7.0
⑨	楽しい	楽しい　面白い　楽しみだった	21	16.4
⑩	覚えていない	わからない　覚えてない　記憶が薄い　その教科があったこと自体忘れていた	10	7.8
⑪	その他	学問ではないが，様々な知識が得られる教科	1	0.8
		自由な感じ	1	0.8
		道徳	1	0.8
		昔の遊び	1	0.8
		他教科で足りない時間の補講	1	0.8
		抽象的	1	0.8
		5 時間目	1	0.8
		席替えをしたイメージ	1	0.8
		ビデオを見る	1	0.8

表２　記憶に残っている生活科の活動

	カテゴリー	内容	人数	割合
①	校内探索	校内を探索したり，学校で働いている人々と話をしたりした	3	2.3
②	地域探索	通学路を歩いたり，地悪の公園や野原などに出かけたりした	20	15.6
③	家族の仕事・手伝い	家族のことを調べたり，手伝いをしたりした	0	0
④	休日の過ごし方	休日に家族とすることを考え，実行した	1	0.8
⑤	町探険	町を探検したり，いろいろな人と話をしたりした	41	32.0
⑥	名人とのかかわり	町の名人に教えてもらったり，学校へ招待した	1	0.8
⑦	公共施設への利用	児童館，公民館などを調べたり，利用したりした	3	2.3
⑧	バス・電車の利用	実際にバスや電車に乗って出かけた	0	0
⑨	季節の変化	季節が変わっていく様子を楽しんだ	6	4.7
⑩	地域の行事	地域の季節の行事に参加した	2	1.6
⑪	自然物での遊び	草花や木の実などで遊んだ	9	7.0
⑫	身の回りのものでの遊び	身の回りのものを使って遊ぶものをつくって楽しんだ	2	1.6
⑬	昔遊び	たこあげ，こままわし，かるたなど昔の遊びを楽しんだ	6	4.7
⑭	飼育活動	虫を捕まえたり，ウサギなどの小動物の世話をした	29	22.7
⑮	栽培	アサガオなどの草花やミニトマトなどの野菜を育てた	80	70.3
⑯	収穫の祝い行事	野菜の収穫を祝って，サラダパーティなどをした	0	0
⑰	できるようになったこと発表会	1 年間にできるようになったことの発表会をした	0	0
⑱	自分の成長の振り返り	自分の成長についての絵本や紙芝居などをつくった	1	0.8
⑲	違った学年の子とのかかわり	幼児を招待するなど違った学年の子と活動した	0	0
⑳	その他	クラスのことを決める	3	2.3
		裁縫や料理	1	0.8
		部屋の飾り付け	1	0.8
		席替え	4	3.1
		二分の一の成人式	3	2.3
		道徳的なこと	1	0.8
		上級生との交流	2	1.6
		料理のマナー講座	1	0.8
㉑	覚えていない		24	18.8

「飼育活動」を合わせると生きものを育てた経験が記憶に残っている者が多い。

③「家族の仕事・手伝い」，⑰「できるようになったこと発表会」，⑱「自分の成長の振り返り」は，自分の成長に関する内容であるが，これらについて挙げている者は⑱の１名のみである。また，⑧「バス・電車の利用」，⑯「収穫の祝い行事」についても記述している者がいない。さらに，㉑「覚えていない」者が，２割近くいる。

表３　生活科で身に付いたこと

	カテゴリー	人数	割合
①	生きものに親しむ	12	9.4
②	自分の生活への季節の取り入れ	0	0
③	自然を大切にする	22	17.2
④	学校への愛着	0	0
⑤	住んでいる町や人への関心	20	15.6
⑥	公共施設や電車，バスを正しく使う	0	0
⑦	他者に要件を伝える	0	0
⑧	感じたことや気づいたことを自分なりの方法で表現する	0	0
⑨	何かをつくり出していこうとする	4	3.1
⑩	自分でやりたいことをみつけ，計画・準備する	0	0
⑪	学習する面白さを知る	0	0
⑫	集団で学ぶ楽しさや協力の姿勢	11	8.6
⑬	身近な人々に感謝する気持ちを持つ	4	3.1
⑭	生活する上で大切な習慣が身につく	11	8.6
⑮	道具を上手に使うなどの技能が身につく	0	0
⑯	学習したことを生活の中で使う	0	0
⑰	自分の得意なことや友だちの良いところに気付く	0	0
⑱	挑戦したり，粘り強く努力する	0	0
⑲	自信を持って生活する	0	0
⑳	夢を持って生活する	0	0
㉑	比べたり試したりして，考える	2	1.6
㉒	何かにたとえて，言い表す	0	0
㉓	本やインターネットを使用して，情報を集める	1	0.8
㉔	身近な人にインタビューして，情報を集める	0	0
㉕	みんなで問題解決の方法を話し合う	0	0
㉖	理科的知識（植物の育て方，など）	22	17.2
その他	社会科的知識（地図記号，地域のことなど）	9	7.0
	実生活に関すること（身近なことなど）	6	4.7
	身の回りへのことへの発見・関心	6	4.7
	感性が豊かになる	1	0.8
	命の大切さ	2	1.6
	生きる力	1	0.8
	視点を変えること	1	0.8
	勉強は机の上だけではないこと	1	0.8
	花を育てる忍耐力	1	0.8
	観察力	1	0.8
	人との関わり	4	7.0
	コミュニケーション力	2	1.6
㉗	思いつかない　特にない　無記入	23	18.0

３．生活科で身についたこと

野田(2015)のカテゴリーに基づき表３の①～㉕のように分類し，それ以外の事柄は㉖「その他」とした。結果は表３の通りである。

最も多い回答が③「自然を大切にする」と㉖その他に含まれる「理科的知識」である。次いで，多い項目が⑤「住んでいる町や人への関心」である。

野田（2015）では，カテゴリー①～③は身近な自然に関する内容，④～⑦は身近な人や社会に関する内容，⑧～⑫が学習上の自立に関する内容，⑬～⑯が生活上の自立に関する内容，⑰～⑳が精神上の自立に関する内容とされている。学習上の自立と生活上の自立についてはそれぞれ 11.7％ の者が身に付いたこととして挙げているが，精神上の自立について挙げている者はいない。

４．生活科の教科としての特徴

生活科の教科の特徴をどのように捉えているかについは，これまで調査されていないため，自由記述から帰納的にカテゴリーを作成した。結果を表４に示す。

教科生活科の特徴として，㉑「理科と社会の導入の教科」と捉えている者が最も多く，さらに，それらに㉒「理科の導入」と㉓「中学年以降の教科の準備」を合わせると，中学年以降の学習の導入的教科として捉えている者が 25％ いる。

また，生活科の内容的な特徴として，①「生きていく上での基礎や大切なことを学ぶ教科」と捉えている者が最も多い。身近なことについて扱う教科として捉えている者も，②～⑤を合わせると約２割いる。体験を通して学ぶ教科として捉えている者（⑤～⑧）は 10.2％，自然に関して扱う教科として捉えている者（⑨，⑩）は 6.3％ である。また，学習の土台となる力（⑪～

⑭）につながると教科と捉えている者は，9.3％である。さらに，㉙「わからない・無記入」という者も２割近くいる。

考察

１．大学生の生活科に対するイメージ

栽培や飼育など自然と触れ合う体験や町を探険するなどの体験をして，楽しかったというイメージを持っている者が多いと考えられる。また，生活の基本的なことを学び，理科と社会の合科というイメージを持っている者も多い。

このようなイメージからは，概ね生活科という教科のねらいに沿ったイメージを持っている者が多いのではないかと考えられる。

表４　生活科の教科としての特徴

	カテゴリー	人数	割合
①	生きていく上での基礎や大切なことを学ぶ教科	25	19.5
②	身近なことを知ったり，学んだりする教科	16	12.5
③	身近なことに興味を持つようにする教科	4	3.1
④	身近なことについて考える教科	5	3.9
⑤	身近なことについて，体験を通して学ぶ教科	1	0.8
⑥	体験を通して学ぶ教科	6	4.7
⑦	体験の大切さを知れる教科	1	0.8
⑧	体験を通して，発見や楽しさを知る教科	5	3.9
⑨	自然とのかかわりの大切や自然について考える教科	6	4.7
⑩	自然に興味・関心を持ってもらう教科	2	1.6
⑪	興味のあることを調べたり考えたり学んだりする教科	4	3.1
⑫	いろいろなことを吸収したり，学んだりできる教科	3	2.3
⑬	生徒の興味を伸ばす教科	3	2.3
⑭	想像力や工夫する力を高める教科	2	1.6
⑮	人間性や感性を高める教科	3	2.3
⑯	人生を豊かにする教科	2	1.6
⑰	友だちとのつながりを高める教科	2	1.6
⑱	他者のかかわり方を学ぶ教科	2	1.6
⑲	生活習慣やルール，マナーを学ぶ教科	4	3.1
⑳	集団生活について学ぶ教科	1	0.8
㉑	理科と社会の導入の教科（道徳，家庭科も含む）	25	19.5
㉒	理科の導入教科	5	3.9
㉓	中学年以降の教科の準備	2	1.6
㉔	幼小の中継的教科	1	0.8
㉕	一般に言われる教科ではない教科	1	0.8
㉖	楽しい教科	2	1.6
㉗	学校に慣れるための教科	1	0.8
㉘	地元のことを知る教科	1	0.8
㉙	わからない　無記入	10	7.8

２．記憶に残っている活動からの生活科内容の検討

本調査の結果も，これまでの調査（野田 ,2015 他）と同様に，アサガオや草花を栽培したことや，学校内や地域を探索したことが記憶に残っていることとして挙げている者が多く，生活科の授業で，生活科の研究校だけなく，一般的な学校においても，これらの体験を通しての内容の指導が充実していたと考えられる。一方，自分の成長に関する内容（③，⑰，⑱）を挙げている者が１名のみで，これらの項目は，先行の調査においても選択率が低い。生活科は，小学校教科の中で，唯一「自己」について扱う教科であり，今回の学習指導要領の改訂においても，これまでの学習指導要領と同様に内容の構成の最上部は，「自分の成長」となっている。子どもたちが自分自身について考えることは，生活科の重要な内容の一部であり，かつ，自分の成長について子どもたちが実感することは，生涯発達的な視点からも非常に重要なことであると思われる。これからの生活科の授業の内容において，子どもたちの記憶に残る活動として，自分の成長に関する体験を考案・工夫していく必要があるのではないかと考えられる。

３．生活科の成果の検討

生活科の成果については，生活科のみで培われることではないが，子どもたち自身が認識しているという点で，それらの成果への重要な教科となっているものと考えられる。

生活科で身に付いたこととしては，③「自然を大切にする」が最も多く，①「生きものに親しむ」も３番目に多く，これまでの調査とほぼ同様に，生活科の目標と合致するように身近な自然に対する興味や関心の高まりへの効果が認識されている。また，本調査では，⑤「住んでいる町や人への関心」も２番めに多く挙げられ

ており，身近な人や社会への興味・関心が認識されており，この点も生活科の目標と合致していると考えられる。

しかし，一方で，本調査において自由記述によって調査をしたことにより，㉖「理科的知識」と回答している者が多いことが示された。この点は，生活科という教科の子どもの意欲，判断力，表現力の育成を目指す特性が，十分には伝わっていない可能性を示唆するものと考えられる。

また，精神的自立⑰～⑳について挙げた者が一人もおらず，記憶に残っている生活科の活動として自己の成長に関する体験がほとんど挙げられていなかったことと連動して，成果としての認識もないと考えられる。今回の学習指導要領改訂においても，生活科の目標の一つとして「自分自身をみつめることを通して，自分の生活や成長，身近な人々の支えについて考えることができ，自分のよさや可能性に気付き，意欲と自信をもって生活するようにする。」が挙げられており，精神的自立に関する成果を子どもたちが認識できるように授業内容や授業方法の検討が必要であると考えられる。

４．生活科の教科としての特徴

生活科の教科としての特徴の認識に関しては，本調査のみにおいて実施されたものである。生活科を受けてきた子どもたちが，生活科をどのような教科として捉えているかを把握するとともに，これから，小学校教員として生活科を教える可能性のある学生が，生活科をどのように捉えているかを知ることにより，今後の大学の授業のあり方を考える上で参考にしたいと考え調査した。

①「生きていく上での基礎や大切なことを学ぶ教科」，②「身近なことを知ったり，学んだりする教科」を挙げている者が多く，かつ，「体験を通して」と記述していた者も他の記述に比べ多かったことより，生きていく上での基礎的で大切なことや身近なことについて，体験を通して学ぶ教科として捉えている者が多いと考えられ，生活科の教科の特徴と合致していると考えられる。

また，㉑「理科と社会の導入」など中学年以降の教科の導入のための教科として捉えている者も多い。しかし，逆に，幼児教育とのつながりについて記述している者は１名のみである。生活科は，幼児期の学びとの接続にとって重要な教科であるが，このような特徴への認識が薄いと考えられる。この点は，記憶に残っている生活科の活動において，⑲違った学年の子とのかかわりを挙げた者がいないこととも連動する。今回の学習指導要領では，幼児期の学びの連続と接続が生活科以外の教科においても重視されているが，生活科は従来幼児期の学びとのつながりを意識した教科でありその中心の教科であると考えられる。それゆえ，これからの生活科の授業内容や指導方法の検討とともに，大学の「生活」授業においてもおさえるべき点であると考えられる。また，中学年以降の学習の導入としての捉えは，基礎的な知識としての導入と捉えている者がいる可能性もあり，学習の自立としての土台作りの教科としての認識をもってもらえられるような小学校での生活科の授業づくりと大学における「生活」の授業の検討が必要であろう。

５．今後の課題

本調査は，小学校教員志望の大学生を対象としたが，自由記述により実施したことにより，記憶に残っている活動も身に付いたことも，さらに教科の特徴においても，覚えていない，思いつかない，わからないなど生活科という教科への認識自体が薄い者がいることが明らかとなり，生活科の認識を高めていくことが今後の課題の一つとして考えられる。

さらに，これまでの調査や本調査の結果より，自己の成長に関する活動の内容や精神的自立に関する成果に課題があると考えられる。今後，生活科において，実際に学校現場で，自己の成長に関して，どの程度扱われ，どのような内容や活動，指導方法がなされているかを調査し，生涯発達にとって重要な自己の成長の土台となる生活科の授業づくりの検討が必要であると思

われる。

引用文献

文部科学省　2008　小学校学習導要領解説生活科編　日本文教出版

文部科学省　2017　小学校学習指導要領

野田敦敬　2005　生活科で育った学力についての調査研究　せいかつ＆そうごう 12, 100-109.

野田敦敬・永田真吾　2005　子どもの生活科学習への思いについての調査研究―附属岡崎小学校第 3 学年・6 学年及びその卒業生への調査を基にして―　愛知教育大学研究報告 54 （教育科学編）, 11-18.

野田敦敬　2015　生活科で育った学力についての調査研究（2013）　せいかつ＆そうごう 22, 32-43.

高橋寛之・藤田静作　1998　中学生の生活科評価と教科イメージ（1）―生活科を体験した中学生に対する意識調査を基にして―秋田大学教育学部教育工学研究報告 20, 43-52.

友田靖雄・石原敏秀　2006　小学校での生活科授業の受講 1 期生の意識調査―全国調査と比較して―教育実践科学研究センター紀要 6, 263-274.

An attitude survey of university students completing "Life Environment Studies." courses in primary school education

Akemi MATSUNAGA
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

The purpose of this study was to clarify university students' attitudes about "Life Environment Studies.". The results indicate that many of the students have an image of nature experiences and search for enjoyment in subjects on "Life Environment Studies.". There are many students who actively participate in cultivation and town exploration, and whose interests in nature and living things have increased. There were few students who described activities or self-development concerning their own experiences.

Key words："Life Environment Studies.", University students, Attitude survey